

2025年4月20日復活日説教

使徒言行録10章34－43節

コリントの信徒へ手紙一15章19－26節

ヨハネによる福音書20章1－18節

2025年、復活日おめでとうございます。今年も皆さまと主のご復活をお祝いできますこと、心から感謝したいと思います。復活日の聖書日課は選択できるようになっていますが、今年はヨハネ福音書から学びます。

ヨハネ福音書ではしるしという言葉がよく用いられます。最初のしるしは、「カナでの婚礼」(ヨハネ2:1-12)ですが、最も重要なしるしは、本日のお話、イエスの復活の出来事です。ただし、復活の出来事がしるしであることは、イエス様が、疑うトマスに対して、「イエスはトマスに言われた。『私を見たから信じたのか。見ないで信じる人は、幸いである。』」(20:29)と語り、次に「このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない」(20:30)と間接的に告げられます。

本日のお話は、「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た」(20:1)ことから始まります。マルコ福音書と同じように、墓の入り口の石はすでに取りのけてありました。マリアは墓の石が取りのけられているのを見たのですが、中には入りませんでした。ただし、「そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って、彼らに告げた。『誰かが主を墓から取り去りました。どこに置いたのか、分かりません。』」(20:2)と続きますので、遺体が盗難?か何かにあったと思ったようです。それゆえ、ペトロともう一人の弟子が墓に向かいます(明記されていませんが、マグダラのマリアも)。もう一人の弟子が先につく理由はわかりませんが、それぞれの確認の仕方を描くためでしょう。もう一人の弟子は、イエス様の頭に巻いていたのであろう亜麻布を見たのですが、中に入りません。後から着いたペトロは、墓の中に入って、亜麻布と頭の覆いを見ますが、何かを理解したとは書かれていません。「それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も中に入って来て、(彼は)見て、(彼は)信じた」(20:8)と告げられますが、何を信じたのかは明記されていません。それは、「イエスが死者の中から必ず復活されることを記した聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである」(20:9)とある通りで、二人は、見たことの理解も、また何を信じるのかも不明確なものでした。

一方、マリアは、「墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中をのぞくと」(20:11)と墓には入らず見るだけでした。ただし、マリアは、「イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が、一人は頭の方に、一人は足の方に座っているのが見えた」(20:12)とあります。「見えた」とあるのは、8節とは言葉が異なるからですが、「見た」と訳しても構いません。彼女は、二人の弟子が見なかった天使たちを見たのですが、「天使たちが、『女よ、なぜ泣いているのか』」と言うと、マリアは言った。『誰かが私の主を取り去

りました。どこに置いたのか、分かりません。』(20:13)と、出来事を誤解したままでした。そして、振り返ってイエス様を見たのですが、それがイエス様だとはわかりませんでした。園の番人だと思い、「**あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか、どうぞ、おっしゃってください。私が、あの方を引き取ります。**」(20:15)と答えてしまいます。イエス様が「マリア」と名前を呼んで語り掛けると、マリアは、「ラボニ(先生)」と答え、やっとイエス様だと理解したのですが、信じたと告げられていません。ただし、「**マグダラのマリアは弟子たちのところに行って、『私は主を見ました』と告げ、また、主から言われたことを伝えた。**」(20:18)のでした。

イエス様の復活についての描写は、四つの福音書とコリントの信徒へ手紙一の記述でそれぞれ異なります。何が本当かという問いが重要ではなく、そこから何を大切にとらえるかが重要です。また、ヨハネ福音書は、全体として信じることの重要性、そして信じた時、この世界に生きていたとしても、全く別の信仰の世界に生きているかのような、瞬時の変化が起こる語り方をします。しかし、そこにおいて大切なことは、人間的理解、理性的判断を否定することではなく、それを超越することです。最大のしるしであるイエス様の復活を告げる、本日のお話でもそれは同じです。

ペトロともう一人の弟子、そしてマリアは、出来事を見ます、それは何かを理解したということです。わからなかったという判断も、誤解も理解のひとつです。ただし、そのままよいということではありません。その状態を超えた時、信仰に至るからです。そしてそれが復活されたイエス様の呼びかけによって起こったことが重要なのです。理解できなくても(ペトロ)、また理解しなくてもなんとなく信じて(もう一人の弟子)、全く別の理解をしてしまっても(マリア)、彼らは、イエス様を通して(マリアは)、マリアを通して(弟子たちは)信仰に至りました。これは、しるしを通して信仰を求めるヨハネ福音書の特徴と異なるように感じますが、しるしそれ自体が信仰の対象ではないからです。それは最大のしるしであるイエス様の復活も同じです。イエス様の言葉から生まれる関係、つまりその言葉が肉体を持った体となって現出する瞬間に、信仰に至ることが大切なのです。これは難しいように思えますが、復活の信仰に至ることが、人間の理解力や判断力などの理性的力にも、人間の信仰深さや信仰歴の長さなど信仰的力にも、左右されないことを意味します。ヨハネ福音書は、この後のお話として、その信仰に至る事柄すらも、イエス様が聖霊を弟子たちに吹きかけることを通して起こったことを告げ、人間が信仰に至るすべてが、主なる神様の恵みであることを告げます。わたしたちにとって、そこまでわたしたちを導いてくださる主なる神様の愛にゆだねることが最も大切なのです。

イエス様は、今日も教会を通してすべての人に、新しい関係と呼びかけます。そのことをもっとも明確に祝うのが本日の復活日です。それはまた聖霊による、死と恐怖から解放をも伴います。イエス様の復活は、だからこそ必ず未来に死を迎えるすべての人の希望なのです。その希望から、少しでも世界が平和になるように、これからもわたしたちは、わたしたちの教会を通して、イエス様の復活を告げ知らせていきたいと思えます。